

【連載】

老健仕事人  看護師

「老健施設の看護」について考える

[第3回 最終回]



入澤美紀子 [いりさわ・みきこ]

介護老人保健施設松原苑(岩手県)
看護部長

深まった地域連携

東日本大震災は、誰もが体験したことのない、町が丸ごとなくなったに等しいような状況で、利用者のなかには家族が犠牲になってしまった、家が流されて戻る家がなくなってしまった等、多くの課題が出てきました。

そのようななか、さまざまな課題をもち寄って、県立病院、行政関係者、市内のクリニック等の看護職との会合に出る機会が多くなりました。

陸前高田市が震災直前に立ち上げた在宅療養を支える会「チームけせんの和」、大船渡市の「在宅ワーキンググループ」等での地域の医療関係者、在宅サポート関係者たちとの交流は老健施設の役割を知ってもらう機会にもなり、顔のつながりができ、相談しやすい環境になれたことはとても大きい収穫だと思っています。

リハビリ専門職も動き出し、「褥瘡ゼロ運動」が始まりました。県内の皮膚・排泄看護認定看護師の方たちも、沿岸部の被災地の看護を気にかけてくれて1年間ボランティアで来てくれました。

現場を見てもらって午後は関連する座学、それに加え夜は必ず交流会をもちました。その積み重ねで現在があります。褥瘡の状態が入所された方の画像を見てもらって、アドバイスをもらうといった関係もできました。

そして震災から2年くらいが経った頃、地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みが示されました。県立病院にも地域包括ケア病棟が開設されることになり、当時同級生だった総看護部長から「老健施設を知ってもらうために職員を見学研修に出したい」と

いう電話をもらいました。もちろん断わる理由などなく、むしろ自分も「知ってもらおうチャンスだ」と思い二つ返事で受けました。

1回目の研修生たちは多職種それぞれの役割と入所までの流れ、老健施設の役割を知ることにより「現場に出て多職種連携で関わっているのはすごい!改めて私たち急性期病院の役割を理解することができました」と、皆が感想を述べてくれました。その後退院調整看護師等を中心に、毎年5～6名の研修生を受け入れています。この研修によりこれまで以上に顔のみえるつながりもでき、他科受診時のスムーズなやりとりにも功を奏していると感じています。

「かかりつけ医連携薬剤調整加算」算定に向けても、まずは看看連携をめざしています。

そこから目的を正確に理解してもらい医師にスムーズにつながっている事例もありますので、そのような連携も含め、今後もぜひ継続していきたいと考えています。

本来の看護師の役割とは

老健施設の看護師の役割とは?と、これまで何度も悩みました。被災地の看護師が「自動血圧計がないから血圧を測れません」と言ったという話を、ボランティア活動に来てくれた大先輩から聞かされ落胆しました。

そのときから「手を使う観察」がいかに大切であり、私たち看護師の究極の手法と言えるかということ研修の機会に話しました。橈骨動脈とうこつに触れたら、大腿動脈に触れたら、頸動脈に触れたら、と医療機器がなくても、看護師として基本的に必要とされる知